
とある魔術の混沌（メギルヴァーダ）

金井龍弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メギルヴァーダ
とある魔術の混沌

【Nコード】

N7430L

【作者名】

金井龍弥

【あらすじ】

あらすじが思いつかない時って、ありますよね？

エピソード？

「——ええい！くそっ！くそっ！あーもうちくしょー不幸すぎますーっ！！」

「そーだね」

変能じみた叫び声を上げつつも、自分と同じ顔をした双子の兄、上条当麻は凄まじい逃げ足を止めようとしない。深夜の裏路地を走り抜けながら、チラリと背後を振り返ってみる。あー、八人。

もうかれこれ二キロ近く走り回っているというのに、まだ八人。無論、元外国人部隊のコックさんでもなければ現代まで生き残った機甲忍者でもない、上条^{かみじょうなつき}捺樹はこの人数相手にケンカをしたって勝ち目は無いとわかりきっているのだが、隣にいるバカ兄貴がやらかし、一緒にいた私は当然巻き込まれたワケで。

薄汚れたポリバケツを蹴飛ばし、黒猫を追い払うように上条当麻は走り続ける。私はその背中を追いかける。っていうか、何もかも全部、

七月十九日。

そう、七月十九日が悪い。明日から夏休みだーっ！などと当麻が尋常ではないハイな気持ちになったからこそ、書店では表紙を一目見ただけで地雷と分かるマンガを手に取り、お腹もすいてないのに一丁豪華に無駄遣いする為にファミレスに入り（私も誘って）、明らかに酔っ払った不良に絡まれる中学生ぐらいの女の子を見て、思わず助けてやっかなー、とか言い当麻のバカが実行してしまったのである。

んで、当麻はまさかトイレからぞろぞろ仲間が出てくるとは思わなかったらしく顔を引きつかせていた。どうやら集団でトイレへ行くのは女子だけの特権だと思っていたらしいです。はい、バカ。

「……結局頼んでいた苦爪ゴヤと鍋牛エスカルゴの地獄ラザニアくる前に飛び出しちまったし、まだ食ってもないのに食い逃げ扱いされてるし。あーもう何なんですかこの不幸は！？」

食べたかった……爆弾チョコパフェ。

当麻が不幸なのはいつもだけど私にまでお裾分けしないでほしい。

勝てないの知ってて人助けして、関係もない私を巻き込んで……今度から当麻のあだ名を「観察処分者」と命名してやろうかな。

顔はそこそこ。悪運。頭はパー。ボンビー。

「頭のネジは足りてる筈なんだけどねー……」

「うぐ……っ」

ぐぎゃあ！と頭をかきむしりながら上条当麻は裏路地から表通りへ一気に飛び出す。月明かりの降りる『学園都市』は、東京都の三分の一ほどの大きさを持つにも関わらず、どこもかしこもびっしりとカップルだらけだった。きっと7月十九日だ。七月十九日が悪いんだと捺樹は心の中で思考する。あちこちに立つ風力発電の三枚プロペラが青白い月明かりと夜景の光を浴びて独身貴族が流す涙みたい にギラギラひかっている。上条当麻はカップル達を引き裂くように夜の街を突っ走る。ザマミロ。

走りつつ、チラリと自分の身体を眺める。“コレ”に宿る力も、こんな状況では何の役にも立たない。不良の一人も倒せないし、テストの点も上がらなければ男子にモテるワケでもない。ではこの力は一体何の為に、誰の為にあるのだろうか、と。

「不幸（だ／ね）」

大方同じ事を考えていたようでお決まりの台詞を呟く。やっぱり双子なんだと改めて感じた。

不良の『集団』を完全に振り切ると、上条兄妹を見失った相手がケータイを使って増援を呼んだりバイクを持ってきたりしてしまうかもしれない。あくまで『スタミナ切れ』でぶっ倒れていたただくためには、適度に上条当麻という『エサ』をちらつかせて相手を走らせ疲れさせるしかない。言うならばボクシングでわざと相手に殴らせまくって体力を奪うようなものだね。

「おるあー！ちくしょうこのクソガキ共止まれやこの逃げ足王！！」

「うるっせえ！ぶん殴らねえだけ感謝しやがれサル波野郎！」

無駄にスタミナを消費すると分かっているがらついつい上条当麻は叫び返す。

（……………馬鹿。何か言われる度に律儀に返していたら無駄に疲れるだけでしょに）

「く、くそ……………やっと撒いたか」

当麻はその場にペタンと座りたくなる衝動を必死にこらえているようだ。私は夜空を見上げて息を吸う。本当、誰も傷つけずに問題を片付けられた。その事だけは自分を褒めてやりたいくらいだった。

「ったく、何やってんのよアンタ達。不良を守って善人気取りか、熱血教師ですかあ？」

刹那、ギクリと当麻の体が凍りついた。

鉄橋に灯りの一つもなかったため、気付かなかったけど。私が走っ

てきた方向から五メートルほど先に、女の子が一人立ってる。灰色のプリーツスカートに半袖のブラウスにサマーセーターという格好の、何の変哲もない中学生ぐらいの女の子だ。捺樹は夜空を見上げながら、このまま後ろへぶっ倒れようかなあと半分本気で思う。ちなみに、ファミレスで絡まれていた女の子が、この子だったりする。

「……っ事はアレだろ？ 後ろの連中が追ってこなくなったってのも」

「うん。めんどいから私が焼いといた」

「ナイス！ 美琴」

親指を立て言い放つ私。私と同じ親指を立てる美琴。げんなりする当麻。

うーん。ていうか、当麻は『美琴を助けよう』なんて思っていないだよね。当麻は“不用意に美琴に近づいた不良達を助けよう”と思っただけなんだよね。相変わらずのお人好し君だね。まあ、そこが当麻の良いところなんだけど。

かれこれ1ヶ月近く顔を合わせてるのに、お互いに名前を覚えようとしんない。別に友達になろうという訳ではないようだ。今日こそは生ゴミになるまでボコリまくると鼻息荒げにやってくるのが美琴の方で、それを適当にあしらうのが当麻。（ちなみに私はただ傍観者でーす）たった一度の例外もない。全戦全勝だった。

適当に負けてあげれば美琴の気も晴れるんだろうけど、当麻は演技

下手なのだ。前に一度、すわマイリマシター、と言ったら鬼のような形相で一晩中追い回された。（当麻がね。私は側で安全に見学してました）

「……つか、俺が何したってんだよう」

「私は、自分より強い『人間』が存在するのが許せないの。それだけあれば理由は十分」

わお。なんと大ざっぱな答えだ。ファンタジーゲームのザコキャラだってもうちょっとマシな答えがあるというのに。

「けどアンタもバカにしてるわよね。私は超能力者（レベル5）なのよ？何の力もない無能力者（レベル0）相手に気張ると思ってるの？弱者の料理法ぐらい覚えているわよ」

この街の中に限っては、『裏路地の不良達』『暴力最強』という図式は当てはまらない。超能力開発という時間割り（カリキュラム）から落ちこぼれた彼らは何の力も持たない無能力の『不』良なのだから。

この街で真に強いのは、美琴のような特待生クラスの超能力者である。

「あの、それな？お前が三万八五七一分の一の才能の持ち主なのは良く分かっているけどさ、長生きしたかったら人を見下すような言い方はやめた方がいいぞ、ホント」

まったくである。

「うつさい。血管に直接クスリ打って耳の穴から脳直で電極ぶっ刺して、そんな変人じみた事してスプーン一つも曲げられないんじゃない、ソイツは才能不足って呼ぶしかないじゃない」

「……………」

確かに、学園都市はそういう場所だ。『記録術』とか『暗記術』とか、そんな名前でこまかして『頭の開発』を平然と時間割り（カリキュラム）に組み込んでいる場所、それが学園都市のもう一つの顔だ。

「スプーン曲げるならペンチ使えば良い」「あまり意味は無いけどね」「火が欲しければ100円でライター使えば良い」「何に使えばいいか分からないけど」「テレパシーなんてなくてもケータイあるだろ」「通話料が掛からないのが良い所」「んなに珍しいモンか、超能力なんて」

と、これは学園都市の身体検査で機械共に『無能力』の烙印を押さ

れた当麻の考え。私は違うよ。れっきとした超能力者（レベル5）だよ。戦闘向きじゃないから美琴とはまだ戦ったコトがないけど。

「大体、どいつもこいつもおかしいんだよ。超能力なんて副産物で悦に入りやがって。俺達の目的ってな、その先にあるもんじゃなかったっけか？」

対して、学園都市で八人しかいない『超能力者』の少女は唇の端を歪めて、

「はあ？……ああアレね。何だったかしら、確か『人間に神様の計算はできない。ならばまずは人間を超えた体を手にしなければ神様の答えには辿り着けない』だったけ？」

「——は、笑わせるわね。一体何が『神様の頭脳』なんだか。ねえ知ってる？解析された私のDNAマップを元に軍用の妹達シスターズが開発されてるって話。どうやら、目的よりも美味しい副産物だったみたいじゃない？」

と、そこまでしゃべって、唐突に美琴の口がピタリと止まる。音もなく、空気の質が変わっていく感覚。

「……ていうか。まったく、強者の台詞よね」

「は？」

「強者、強者、強者。生まれ持った才能だけで力を手に入れ、そこに辿り着くための辛さをまるで分かってない——マンガの主人公みたいに不敵で残酷な台詞よ。アンタの言葉」

ざざざざざざ、と鉄橋の下の川面が、不気味なぐらい音を立てる。わーお。くわばらくわばら。

「おいおいおいおい！年に一度の身体検査見て見るよ？俺の能力はゼロでお前は最高位だぜ？その辺歩いてるヤツに聞いてみるよ、どっちが上かなんて一発で分かんたら！」

「ゼロ、ねえ」

美琴は口の中で転がすように、その部分だけ繰り返した。一度スカートのポケットに突っ込んだ手が、メダルゲームのコインを掴んで再び出してくる。

「ねえ、超電磁砲^{レールガン}って言葉、知っている？」

「あん？」

「理屈はリニアモーターカーと一緒にね、超能力な電磁石を使って金属の砲弾を打ち出す艦載兵器らしいんだけど」

ピン、と美琴は親指でメダルゲームのコインを真上へ弾き飛ばす。
ヒュンヒュンと回転するコインは再び美琴の親指に載って、

「——こういうのを言うらしいのよね」

言葉と同時。

音もなく、いきなりオレンジ色に光る槍が当麻の頭のすぐ横を突き
抜けた。わーお。

「こんなコインでも、音速の三倍で飛ばせばそこそ威力が出るの
よね。もっとも、空気摩擦のせいで五メートルも飛んだら溶けち
やうんだけど」

鉄とコンクリートの鉄橋が、まるで頼りない吊り橋のように大きく
揺らいた。ガキービシ！とあちらで金属のボルトが弾け飛ぶ音が鳴
り響く。

「……………っ！」

超電磁砲レールガンを目の辺りにして怖じ気づく兄あり。なっさけない。まっ
たく情けない兄だよ。まあ、当然か。あれぐらいの威力を見せつけ
られたら怖じ気づくのも普通かな。

「——で、メエ。まさか連中追い払うのにソイツ使ったんじゃないかな
ーだろうな……ッ!!」

アレくらった体は素敵な穴が出来そうだ。

「ばっかねえ。使う相手ぐらい選ぶわよ。私だって無闇に殺人犯にはなりたくないもん」

そりゃそうだ。

「あんな無能力——追い払うにゃコイツで十分でしょ、っと!」

美琴の前髪から角のように青白い火花が散った瞬間、槍のごとく一直線に雷が襲いかかってきた。

避ける、なんて器用な事出来るはずない。何せ相手は超能力者の髪から迸る青白い雷撃の槍。言うならば黒雲から光の速さで落ちる雷を目で見て避けると言っているのと同じだ。

ズドン!!という爆発音は一瞬遅れて激突した。

とっさに顔面を庇うように差し出した右手に激突した雷撃の槍は、当麻の体内で暴れるのみならず、四方八方へと飛び散って鉄橋を形作る鉄骨へと火花を散らした。……………“ ように見えた”

「で、何でアンタは傷一つないのかしら?」

言葉こそ気軽なものだが、美琴は犬歯を剥き出しにして当麻を睨んでいる。

周囲に飛び散った高圧電流は橋ね鉄骨を焼く威力だった。にも関わらず、直撃を受けた当麻は右手が吹き飛んだりしていない。………どころか、火傷一つ負っていない。ふっじみいゝ♪

当麻の右手が、数億ボルトにも達する美琴の雷撃を吹き飛ばしたのだ。

「まったく何なのよ。そんな能力、学園都市の書庫バンクにも載ってないんだけど。私が三二万八五七一分の一の“才能”なら、アンタは学園都市でも一人きり、二三。万分の一の“天災”じゃない」

忌々しげに呟く美琴、当麻は一言も答えない。

「そんな例外を相手にケンカ売るんじゃ、こっちもレベルを吊り上げるしかないわなよね？」

「……、それでもいっつも負けてるくせに」

返事は額から飛び出す『雷撃の槍』を使い、音速を軽く超える速度で襲いかかってきた。だが、それはやはり当麻の右手にぶち当たっ

た瞬間、四方八方へと散らされてしまふ。さながら、水風船でも殴り飛ばすように。

幻想殺し（イマジンプレイカー）

一般的にはテレビの笑い者——そして学園都市の中では数式の確立された超能力。その『異能の力』を使うモノなら、それがたとえ神様の奇跡であつても問答無用で打ち消す異能力。それが異能の力であるならば、美琴の超能力『超電磁砲』にしたって例外はない。ただし、当麻の幻想殺し（イマジンプレイカー）は『異能の力』そのものにさか作用しない。簡単に言えば、超能力の火の玉は防げて、火の玉が砕いたコンクリの破片は防げない。効果も『右手の手首から先』だけ。他の場所に火の玉が当たれば問答無用で火だるまになっちゃうんだよね。なので、

（死ぬ！ホントに死ぬ！ホントに死ぬかと思つた！きゃーっ！！）

当麻は余裕綽々の顔をビキビキひきつらせていた。たとえ光の速度の『雷撃の槍』を完全に打ち消す『右手』を持っていたても、『右手』にぶつかったのは完全にただの偶然なわけ。内心で心臓をバクバク言わせながら、当麻は必死に大人な笑みを取り繕つてみる。そこだけは評価してあげてもいいと思う。+2点。

「なんていうか、不幸っつーか……ついてねーよな」

当麻は今日一日、七月十九日の終わりをこう締めくくつた。たった

一言で、本当に世界の全てに嘆くように。

「オマエ、本当についてねーよ」

主人公設定。（前書き）

これを見たら捺樹の隠された『能力』が確実にネタバレします。なので、「楽しみに取って起きたいな」と思う方はリターンし「別にいいやつ」と思う方は見て下さい！

主人公設定。

かみじょうなつき
上条捺樹

能力Ⅱ 混沌
メギルヴァーダ

相手の心に入り込み闇を見つけ支配する。早い話が吸血鬼^{ヴァンパイア}二つ名としては『闇使い（ダークニーズ）』と呼ばれている。闇なら全て操れる。（例・影、血、雨雲、夜）

レベルⅡ 5

成績Ⅱ 優秀（体育を除く）

容姿Ⅱ 端麗（双子にも関わらずあまり似ていない）

兄の当麻と違って超が付く程の幸福者。当麻の事が大好き。別に恋愛対象として見ているワケではなく、あくまで兄妹としての『好き』だ。実は極度の人見知り。普段は当麻以外に喋らない。緊張し過ぎて喋れない。なので親しい友達は少ない。御琴は何故かすぐに仲良くなれた。単に淒く気が合うだけなのかもしれない。

男友達はまず兄の当麻が許さない。男を『妹に近づけさせない』をモットーに生きている色々過保護過ぎである不幸兄貴。

当麻が過保護になった理由は捺樹との過去にあるらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7430/>

とある魔術の混沌（メギルヴァーダ）

2010年11月16日07時45分発行